

教育プログラム推進と地域連携活動の 在り方に関する検討（3）

－ルーブリックを用いた学生の学びの姿－

眞榮城 和 美
春 日 文
千 崎 美 恵

問題と目的

昨今の高等教育機関においては、教育内容の質の向上が目指されており、特に、教養・知識等の修得に加え、課題発見・探求のための批判的思考力や判断力、チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担い得る倫理的・社会的能力などを育成することが求められている（文部科学省、2016）。

本学では、学内の教育プログラム推進助成を受け、2017年度より人間総合学部エデュテイメント大学¹⁾を開始し、地域連携活動を通じた学生の学びの深化について明らかにしてきた。具体的な活動成果については、「教育プログラム推進と地域連携活動の在り方に関する試み（1）」（眞榮城・浅岡・目良、2017）および「教育プログラム推進と地域連携活動の在り方に関する試み（2）」（眞榮城和美・石沢順子・土橋久美子・やたみほ・大貫麻美・浅岡靖央・目良秋子・宮下孝広、2018）として報告している通りである。

白百合女子大学人間総合学部エデュテイメント大学は、参加した親子（幼児期から児童期の子どもとその保護者）からの評価も肯定的であり、プログラム開始当初に掲げていた「大学としての社会貢献活動の発展」も推進

することができているものと捉えている。

また、過去2年間の活動を通して、学内においても、本取り組みが課題発見・探求のための批判的思考力や判断力の向上、および、チームワークやリーダーシップを発揮することができる学習機会として認識されつつある。これらの実績を踏まえ、2019年度からは、さらに2年間の教育プログラム助成を受け、「エデュテイメント大学を通した学生への教育効果の可視化」を目的とした活動を継続することが可能となった。

教育効果を可視化する方法は様々であるが、今年度の取り組みでは、ルーブリック（学習到達度を示す評価基準を観点と尺度からなる表として示したもの）を用いた検討を行うこととした。また、ルーブリックを用いた検討についても多角的（学生評定・教員評定・外部講師評定など）に行うことが可能であり、学生への教育効果も短期的なものから中・長期的な観点から検討できるが、本研究においては、学生評価を用いた短期的な教育効果について検討することを目的とした。

方法

プログラム開催までの流れ：2019年度実施内容については、2018年度内に全プログラムの概要について検討した。なお、これまでの取り組みを通して、地域のニーズおよび学生への教育効果を配慮し、平日の午前中に実施する「子育て支援ルーム“りすぶらん・あんふあん”」を開設することとなった。具体的な内容はFigure1の通りである。子育て支援ルームは姉妹校の仙台白百合女子大学で先行して開始されていたことから、実施方法や実施内容について仙台白百合女子大学の「ゆりっこ広場」（上岡、2019）の取り組みを見学し、実施の参考にした。

事務作業については、担当者を1名配置し、社会連携センター職員と連携を取りながら活動を開始した。

子育て支援ルーム“りすぶらん・あんふあん”の実施時期は2019年5月から7月であった。参加者は毎回0歳から3歳の子どもとその親15組の募集枠中、平均参加組数は10組であった。本論文の調査対象者は、心理学研究法の授業時間内に実施された第1回目・第3回目・第7回目の活動に参加した発達心理学科の3年生56名とした。

りすぶらん・あんふあん

Les lys blanc enfants

白百合女子大学はフランス系カトリック(シャルトル聖パウロ修道女会)の大学です。そこで、子育て支援ルームの名前も「りすぶらん(lys blanc)・白百合」あんふあん(enfants)「こどもたち」と、フランス語で表現してみました。

<p>◎5月8日(水) ママ・パパのリラクゼーション法 いっしょにみつめてみませんか? 発達心理学科の授業で紹介しているリラクゼーション法を学生たちと一緒に体験できる時間です。ホッとひとときに来て下さい。香り袋作り体験もあります! 担当: 発達心理学科学生と准教授長城和夫</p>	<p>◎6月27日(木) ようこそ!! どうぶつの森へ! ～森にはどんなどうぶつがいるかな?～ 動物をテーマとして室内遊びを行います。うちではなかなか出来ない遊びをお子様と一緒に楽しみたいと思います。学生によるエプロンシアターもあります! 担当: 初等教育学科学生と教授日良秋子</p>
<p>◎5月20日(月) 紙コップで遊び、 子どもの「作る活動」の芽生えを発見!! たくさんの紙コップを使って遊びます。ハサミやのりなどは使いません。子どもが物と関わり遊ぶ姿から、作る活動の芽生えを一緒に感じてみましょう。 担当: 初等教育学科学生と准教授権橋けんき</p>	<p>◎7月3日(水) 親子でふれあい遊びを楽しもう! 生活のちょっとした時間にうたって遊べる、いろいろなふれあい遊び、うた遊びをご紹介します。一緒にふれあい、目を含ませ、心を通わせもひと時を過ごしましょう。おうちの方にもお手伝い頂いて、シャボン玉も楽しみます。 担当: 初等教育学科学生と准教授川口潤子</p>
<p>◎6月12日(水) 身近な物で楽器を作ろう! みんなで歌を歌いましょう! 身近な物でマラカスやタンバリンなどの楽器を作ります。自分だけの手作り楽器を鳴らしながら、みんなで楽しく一緒に歌いましょう。歌がもたらす沢山の効果もお伝えします! 担当: 発達心理学科学生と助教藤田文</p>	<p>◎7月17日(水) 親子で電車ごっこ☆ 自分の電車、作って乗って線路を走ろう! お絵かきしたダンボールの電車に乗って線路を歩きます! 発車オーライ、トンネルくぐって踏切でストップ、坂道まいしよ! 体を動かして遊びのリズムを感じてみましょう! 担当: 発達心理学科学生と助教千嶋美恵</p>
<p>◎6月14日(金) 親子で運動遊びを楽しもう! マットの山を越えたり、トンネルをくぐったり、ボールや布などを使ったりして遊びます。一緒に体を動かして楽しむことで親子のコミュニケーションにもつながりますよ! ご自宅でもできる運動遊びもご紹介します。 担当: 初等教育学科学生と准教授石沢順子</p>	<p>◎7月23日(火) 絵本の読み聞かせ、まだ早い?! ～五感で楽しむ絵本の世界～ 「絵本っていつから読んであげるのがいいの?」「うちの子に合った絵本って何?」などなど…。子育て中、「???」って思うこと、スッキリさせませんか? 五感で楽しみながら、絵本の魅力を再発見しましょう! 担当: 初等教育学科学生と准教授土橋久美子</p>

「りすぶらん・あんふあん」キャラクター募集中!
募集期間: 5月10日～5月31日
 参加時に右のスペースにリスの絵を描くか、持ってきてお。
※この募集頂いた作品はご返却できませんので、ご了承ください。

Figure1 エデュテイメント大学 子育て支援ルーム“りすぶらん・あんふあん”前期

調査内容：参加学生は、授業初回・活動準備時・活動終了時の3時点でループリック（Table1）に記入した。ループリック作成に際しては、活動内容と目的の理解度・本取り組みの効果的な実践方法に対する積極的な態度・事前課題への取り組み姿勢・他の学生との協働姿勢・授業のディプロマ・ポリシー（本授業の場合には「心理学の基本的な方法を身につけることができる」）について、5段階で評定する内容を設定した。さらに、ループリックの自己評定を行ったことによる気づきについて自由記述を求めた。

Table1 りすぶらん・あんふあん参加学生 記入ループリック

	F (0点)	C (1～6点)	B (7点)	A (8点)	S (9～10点)
活動内容と目的を理解している (10点)	全く理解していない。	理解している部分もあるが、理解していないことが多い。	ほぼ理解している。	理解している。	しっかりと理解しており、独自のアイデアも提供できている。
本取り組みの効果的な実践方法について自分で調べる等、積極的な態度で臨んでいる (10点)	取り組んでいない。	取り組んでいるが、消極的である。	自ら取り組んでいるが、情報収集量が不足している（客観的資料が不足している）。	自ら積極的に取り組んでおり、客観的資料収集を行うことができている。独自性や説得力にやや欠ける。	自ら積極的に取り組んでおり、客観的資料を十分に揃えている。調べてきた内容について独自性や説得力がある。
授業担当者から呈示された事前課題に積極的に取り組んでいる (10点)	取り組んでいない。	取り組んでいるが、消極的である。	自ら積極的に取り組んでいるが、説明力に欠ける。	自ら積極的に取り組んでおり、十分な説明力を持っている。独自性にはやや欠ける。	自ら積極的に取り組んでおり、調べてきた内容について独自性や説得力がある。
他の学生メンバーと協働して活動している (10点)	他の学生メンバーと協働していない。	他の学生メンバーと協働しているが、消極的な態度が目立つ。	他の学生メンバーと協働しており、多少、主体的にかかわっている認識がある。	アサーティブである。他の学生メンバーと協働しており、主体的な発案を試みている。	アサーティブである。他の学生メンバーと協働しており、かなり主体的に発案している。独自性がある。
心理学の基本的な方法を身につけることができる (10点)	基本的な方法を身につけていない。	基本的な方法をほぼ身につけていない。	どちらとも言えない。	基本的な方法をほぼ身につけている。	基本的な方法を身につけている。

結果

1. 各プログラムの実践報告

2019年度に開始した子育て支援ルーム“りすぶらん・あんふあん”の前期活動は全8回であった。その中から本研究の調査対象となっている3回分についての実践について主担当者が下記の通りにまとめた。

第1回：パパ・ママのリラクゼーション法いっしょに見つけてみませんか
(眞榮城和美)

活動の目的

地域の子育て世代に向けて、ほっと出来る場の提供を目的とした。リラクゼーション法や日々の生活を振り返るヒントについて情報提供し、今年度から開始する子育て支援ルームについての紹介を通して、地域資源への気づきを促すことも目的とした。子育て支援ルームの紹介として、名称の由来について次の通りに広報ツール上で紹介した。「白百合女子大学は、フランス系カトリック（シャルトル聖パウロ修道女会）の大学であり、子育て支援ルームの名前を『りすぶらん（lys blanc）：白百合』『あんふあん（enfants）：こどもたち』と、フランス語で表現してみました。』。また、りすぶらん・あんふあんで目指していること（ホッとできる場の提供・子育てや子どもの発達について一緒に考える場の提供）についても説明し、地域にある子育て支援の場の1つとして活用してもらえるように働きかけた。

学生にとっては、発達心理学科の中でこれまで学んできたことを実践の場面で活かすことを目的とした。特に、課題発見・探求のための批判的思考力や判断力、チームワークやリーダーシップを発揮できる場の提供を目指した。

活動時の学生への配慮事項（事前指導）

事前準備時には、Table2に示した説明を行い、授業内での達成目標を共有した。

実際の子育て支援ルーム活動時には、服装等への配慮、利用者への声かけの方法、当日の案内、活動時の役割分担などについて説明し、学生のリサーチ・クエスチョンに沿って、観察やインタビュー活動が可能になるように工夫した。また当日の司会進行役になる学生への事前指導（台本の提供）を行った。

Table2 活動開始前の授業内説明事項

授業数	授業テーマ	
1	研究テーマの見つけ方	リサーチ・クエスチョン→キーワード →文献検索方法再学習
2	研究技法を学ぶ1	「子育て支援」というテーマで 質問紙法・面接法・観察法を用いた研究をデザインする
3	研究技法を学ぶ2	実践の準備 プレイルームにて実践準備
4	研究技法を学ぶ3	調査実践（質問紙調査の実践・面接の実践） *含授業時間外
5	研究発表	調査結果報告 *含授業時間外→翌週までにレポート提出



Figure2 第1回 活動風景

第3回 身近な物で楽器を作ろう！みんなで歌を歌いましょう（春日文）

活動の目的

親子で楽器を作るという共同作業を通して、親子の相互行為を促すとともに、参加者に歌をより身近な遊びとして日常に取り入れられるように、

また、歌の持つ子どもへの効果を感じられるように伝えることを目的とした。具体的には、学生が参加者に対して、マラカスとタンバリンの作り方を説明し、共同作業場面では親子の活動を促しつつ、適切な援助をする力を発揮できる場の提供を目指した。また、歌と一緒に歌うことを通して、歌により促される親子間の情動の表出を学生および参加者が体験することを目的とした。

活動時の学生への配慮事項（事前指導）

最初に活動の目的を説明し、当日の流れを説明した。楽器製作は、マラカスとタンバリンとした。マラカスは、小さいペットボトルにビーズを入れて、タオルでくるみ、両端をゴムで留めて完成する。タオルは汚れたら洗うことができるため衛生面で利点があることや、家庭にある身近な素材で作成することの良さを伝えた。タンバリンは、ストローをハサミで短く切って、2枚の紙皿の間に挟み、テープで固定し、テープで周囲を貼って完成する。とても軽いため、子どももしっかり掴むことができ、万が一自分の顔にぶつけてしまっても怪我をすることはないことを伝えた。また、当日、皆で歌う曲については、参加者が戸惑わないような身近な歌を選ぶように伝え、学生に選曲をさせた。当日、学生が主体的に司会や親子へのサポートができるように指導した。



Figure3-2 第3回 活動風景

第7回 親子で電車ごっこ!自分の電車、作って乗って線路を走ろう!

(千崎美恵)

活動の目的

参加者に親子のスキンシップや共同作業、集団遊びの大切さ、楽しさを感じてもらう場の提供を目指した。具体的には、全体で輪になって、名前呼び・手遊び・触れ合い遊びを実施、次に、ダンボールに親子でお絵かきをして自分だけの電車をつくる共同作業、そして、トンネル・坂道・踏切・駅（シール貼り）などがある線路を歩いて楽しみ、親は子どもが線路を回るのを時には手助けをしながら見守るようにした。

学生にとっては、子どもの様子・親子の関わりについて、自分のリサーチ・クエスチョンに基づいて行動観察・情報収集を行うこと、および対象者に負担なく、調べたいことを伺うインタビューガイドの作成など、実践の場における調査方法の習得を目的とした。

活動時の学生への配慮事項（事前指導）

授業の一環で行われる「子育て支援ルーム」ではあるが、参加される親子にとっては、子育て支援ルームを活用しているという意識で参加される一般の方々になる。参加される親子が気持ちよく有意義な時間を過ごすことが第一の目的となることを強調、研究のための無理強いや、配慮のない声掛けについて注意喚起した。例えば、「お子さんおとなしいですね」「マイペースですね」などの言葉に親が過敏に反応する可能性があることを伝えた。親にインタビュー等を依頼する際、親が子どもに注意を向けられなくなるので、学生はペアになり、交互に親と子に係れるよう指導した。学生はプログラムの前半と後半でプログラム運営担当と研究のための観察担当に分かれ、それぞれが自分の役割に集中できるよう工夫した。進行係を中心に台本をもとにリハーサルを丁寧に行った。



Figure4 第7回 活動風景

2. 参加学生全体の学びの姿の可視化ー ルーブリックを用いた検討ー

学生による3時点（授業初回・実施準備中・実施後）ルーブリック記載内容について、①活動内容と目的の理解度、②本取り組みの効果的な実践方法に対する積極的な態度、③事前課題への取り組み姿勢、④他の学生との協働姿勢、⑤ディプロマ・ポリシーの達成度）の5側面別に反復測定（対応のある）による一元配置分散分析と多重比較を行った。結果は側面別以下に示す通りであった。なお、ルーブリックの評定基準はFからSまでの5段階評定での回答を求めているため、F=1, C=2, B=3, A=4, S=5として得点化し、分析に用いた。

- ① **活動内容と目的の理解度**：活動内容と目的理解度に関する評価時点変化について検討した結果、授業開始時よりも活動準備時に上昇し、さらに、活動終了時には授業開始時よりも評価が高くなっていることが示された（ $F(158, 2) = 27.60, p < .001$ ）。

- ② **本取り組みの効果的な実践方法に対する積極的な態度**：取り組みに対する積極性の評価時点変化について検討した結果、授業開始時よりも活動準備時に、また活動準備時よりも活動終了時に積極性が増していたことが示された ($F(158, 2) = 16.92, p < .001$)。
- ③ **事前課題への取り組み姿勢**：事前課題(自分のリサーチ・クエスチョンを明確にする等)への取り組み姿勢の評価時点変化について検討した結果、授業開始時よりも活動準備時と活動終了時に事前課題への取り組み姿勢が高くなっていることが示された ($F(158, 2) = 14.68, p < .001$)。

Table3 学生評価のループリック5側面 反復測定による一元配置分散分析

		Mean	SD	F値	多重比較
目的理解	1 授業開始時	3.21	0.95	27.60***	1<2, 1<3
	2 活動準備時	4.00	0.53		
	3 活動終了時	4.18	0.61		
積極性	1 授業開始時	3.38	0.68	16.92***	1<2, 1<3 2<3
	2 活動準備時	3.78	0.51		
	3 活動終了時	4.04	0.61		
事前課題	1 授業開始時	3.30	0.93	14.68***	1<2, 1<3
	2 活動準備時	3.92	0.67		
	3 活動終了時	4.09	0.78		
協働	1 授業開始時	3.68	1.10	2.62†	
	2 活動準備時	3.94	0.74		
	3 活動終了時	4.07	0.88		
ディプロマ	1 授業開始時	3.46	0.69	2.62*	1<3
	2 活動準備時	3.70	0.61		
	3 活動終了時	3.84	0.81		

† $p < .10$, * $p < .05$, *** $p < .001$

- ④ **他の学生との協働姿勢**：他の学生との協働姿勢については調査時変化による違いが認められる傾向が示唆されたが、多重比較の結果、評価時点による有意差は認められなかった。
- ⑤ **ディプロマ・ポリシーの達成度**：ディプロマ・ポリシー（本授業の場合には「心理学の基本的な方法を身につけることができる」）の評価時点変化について検討した結果、活動開始時よりも活動終了時に達成意識が高くなっていることが示された（ $F(158, 2) = 2.62, p < .05$ ）。

3. 参加学生全体の学びの姿の可視化－自由記述を用いた検討－

学生の自由記述内容について活動実施前（授業開始時・活動準備時）と活動実施後の2時点に分けてテキストマイニング（User Local, 2019）による分析を試みた。

その結果、実施前よりも実施後に「観察」と「データ」という名詞の出現頻度が高くなっていることが示された（共に実施前0%，実施後100%）。また、「子ども」と「お母さん」という名詞も実施後に増えていた（子ども：実施前7%，実施後93%，お母さん：実施前0%，実施後100%）。

一方、実施前の記述頻度が実施後よりもやや高くなる名詞もみられた（「積極的」：実施前68%，実施後32%，「協力」：実施前51%，実施後49%，「グループ」：実施前56%，実施後44%）。

また、実施前の自由記述では、「積極的に活動に関わっていこうと思っているがまだまだ基本的な知識や具体的な情報に欠けているという課題が多く見つかった。」といった課題への焦点化を中心とした自己の学びの姿への注目が見られた。さらに、実施後には「グループでうまく情報を共有でき、お互いの理解も深められた。」「具体的に評価基準が記載されている

ため、自己意識について考えさせられる機会になったと感じました。」「何度か自己評価を行ったことで、次に何に向かって学習を深めて行くべきかを毎度考えて次ぎへつなげていくことができました。」といった記述が見られた。

4. 参加学生全体の学びの姿の可視化－実施者から見た検討－

第1回目の実施担当者から見た参加学生の様子としては、次の3点にまとめることができた。①開始時には参加親子の様子を眺めていた学生も徐々に参加者と触れ合うようになっており、活動中にも積極性が向上している様子が見られた。②自分たちのリサーチ・クエスチョンを意識しながら、グループメンバー同士協力して親子の様子を観察している姿が見られた。③アンケートやインタビューへの協力依頼をする際には、できるだけ参加者の負担にならないように配慮していた様子が見られた。

第3回目の実施担当者から見た参加学生の様子については、次の通りであった。①子どもの対象年齢が0～3歳としたため、楽器を作る作業に予想以上の時間がかかった。今後は、製作する楽器を1種類にするなどの工夫が必要であると考えている。②参加者の様子を観察しながら、適宜、声かけをすることができている様子が見られた。③楽器の音が大きく学生の声が伝わりにくい印象を受けたため、マイクを準備するなどの配慮が必要であったと感じた。

第7回目の実施担当者から見た参加学生の様子としては、次の3点が挙げられた。①全員が輪になって触れ合い遊びを展開する流れは、参加者と学生がひとつになって盛り上がったように感じられた。②前半は親子の共同作業（触れ合い遊び、お絵かき）、後半は運動遊びの構成になっており、学生は、観察を担当するプログラムに応じて自分のリサーチクエスチョンを考えており、各々の仮説と照合しながらの観察ができていたように感じ

られた。③プログラム運営担当と観察担当に役割を分けたことによって、プログラムの運営に関してもチームで協力して積極的に関与することができたようであった。

考察

学生の学びの姿の可視化

本研究は、大学の授業を活用した子育て支援活動に携わった学生の学びの姿について、学生評定によるループリックを用いた検討を行い、学生の学びの深化について可視化することを目的とした。特に、活動実施前と活動実施後の学生評定の変化に注目した短期的な学びの姿について可視化することを試みた。

その結果、活動目的を理解し、効果的な活動実践に向けて積極的に取り組む姿勢や自らのリサーチ・クエスチョンを明確にした上で事前課題に取り組むといった観点において、学生自身が成長を自覚している様子が明らかになった。一方、「協働」に関わる認識は実施前後での有意な変化は認められなかった。この結果は、学生自身が授業開始時や活動準備時からすでに協働で取り組むべき課題であると認識していたことが関わっているものと考えられる。

実施者からみた学生の学びの姿についてまとめた結果、活動中にも学生の学びの深化が現れていたこと（積極性の向上・自身のリサーチ・クエスチョンの明確化・チームワーク力の向上など）が読み取れた。このような結果が得られた背景には、本取り組みが全体的に、研究の題材としての親子観察であるとともに、発達心理学を学ぶ学生として、実際に親子への支援活動に携われたことが関連しているものと考えられる。これらの体験は、今後の研究のリサーチ・クエスチョンの発展に寄与していくことが期待できるものと考えている。また、自分の職業選択に関するヒントを得る体験

につながることを期待できるのではないだろうか。

大学卒業時のチームワーク能力を、チームワーク能力を向上させるトレーニングへの在学時の参加経験の有無で比較した研究（太幡、2019）によると、チームワーク能力を向上させるトレーニングへの在学時の参加経験がある者はない者に比べ、大学卒業時に、チームワーク能力の構成要素に関する半数以上の下位尺度（コミュニケーション能力やモニタリング能力など）や社会的スキルが高いという結果が得られたと報告されている。本研究での取り組みは、太幡（2019）の実施しているトレーニングとは異なるものの、協働（チームワーク）やモニタリング能力が求められる実践的な取り組みであり、大学での学びとしては今後の社会人基礎力の向上にも影響を及ぼす可能性のある重要な経験であると言える。

学生の学びの深化を可視化する際にループリックを用いることの有効性については、例えば、「具体的に評価基準が記載されているため、自己意識について考えさせられる機会になったと感じました。」「何度か自己評価を行ったことで、次に何に向かって学習を深めて行くべきかを毎度考えて次ぎへつなげていくことができました。」といった学生の自由記述から読み取ることができよう。これは、学生自身のモニタリング能力や状況把握能力の向上に役立つものと言えるのではないだろうか。

今後の課題

今回の各プログラムは、単発のイベントにおける研究計画であったため、情報収集には限界が感じられた。今後は、本事業に関心を持った学生が継続的に関わることを通じて、継続的な観察が可能になるとともに、子育て支援事業としても地域への貢献が期待できるのではないだろうか。

また、本活動を通した学生の学びの姿については、進級後や卒業後にも追跡調査を行う等、中・長期的視野に基づく検討が必要であると考えている。

脚注

注1) エデュテイメントとは、教育を意味するエデュケーション (education) と、娯楽を意味するエンターテインメント (entertainment) を合わせた造語である。

引用文献

眞榮城和美・浅岡靖央・目良秋子, 2017 教育プログラム推進と地域連携活動の在り方に関する検討－エデュテイメント大学活動を通して (1)－白百合女子大学研究紀要第53号、93-112.

眞榮城和美・石沢順子・土橋久美子・やたみほ・大貫麻美・浅岡靖央・目良秋子・宮下孝広, 2018 教育プログラム推進と地域連携活動の在り方に関する検討－エデュテイメント大学活動を通して (2)－白百合女子大学研究紀要第54号、85-99.

文部科学省, 2016 平成28年度 文部科学白書, 第5章 高等教育の充実.

太幡直也, 2019 大学卒業時のチームワーク能力－チームワーク能力を向上させるトレーニングへの在学時の参加経験の有無による比較、パーソナリティ研究, 27 (3), 246-248.

上岡紀美 2019 仙台白百合女子大学 「ゆりっこ広場」
<http://sendai-shirayuri.ac.jp/event/event006392.html>
User Local 2019 <https://textmining.userlocal.jp/>

謝辞

まずは、イベントに参加してくださいました地域のみなさまに改めて心より御礼申し上げます。今後もし是非ご参加いただけますようお願い申し上げます。今年度も、調布市生活文化スポーツ部生涯学習交流推進課の武田悠児氏には、広報活動・HP記事作成と多岐に渡ってご活躍いただきました。チラシ作成をご担当くださった本学非常勤講師の柳田寛之先生、プログラムのノベルティグッズデザイン担当の鳥羽澄子氏にも引き続きお世話になっております。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。子育て支援ルーム開設前に快く本学教員の見学を引き受けてくださいました上岡紀美先生（仙台白百合女子大学）、先生の活動のお陰で本学の子育て支援ルームも開設に漕ぎつくことが叶いました。この場をおかりして感謝申し

上げます。

最後になりますが、学内に社会連携センターが設立されたことにより、地域との連携活動が展開しやすくなりました。広報活動につきましても新たな視点を提供してくださいました関係者のみなさま、調布市子育て応援サイト「コサイト」からも取材に来ていただき、本活動について情報発信をしていただきました。本当にありがとうございました。

これからも、よりよい形で本活動を継続展開することにより、本活動に携わってくださっている皆様への御礼とさせていただきたいと考えております。